

# 入浴図を伴う「悲しみの泉」

Bathing in the Holy Blood of Christ

保井 亜弓  
YASUI Ayumi

## はじめに

キリストの傷から滴る血で満たされた泉で、我先に衣を脱いでその血に浸かろうとする人々（図22）。その光景は気味悪く、奇怪に映るかもしれない。しかし、これはキリストの聖血で清められる人間の魂を示しているのである。このようなキリストの聖血の泉は、「悲しみの泉 Fons pietatis」と呼ばれる<sup>1</sup>。水による清めとしてまず思い浮かぶのは、ユダヤ教およびキリスト教における洗礼であろう。聖書に記された「生命の泉 Fons vitae」は、キリストのメタファーとして、「悲しみの泉」や「慈悲の泉 Fons misericordiae」とならんで用いられるようになる。「悲しみの泉」では、しばしば泉の水（＝キリストの血）を飲んだり、それを浴びたりする人間の姿が表される。このような表現が成立する背景には、キリストの身体と血であるホスチアとぶどう酒が分け与えられる聖体拝領の儀式がある。「悲しみの泉」の図像表現は、「悲しみの人」あるいは「磔刑」を伴うことが多く、それに代わって幼児キリストなどが描かれる場合もある。本論ではまず典拠となる聖書などの記述によりキリスト教における泉、水、血の意味を示した後で、「生命の泉」および「悲しみの泉」の図像を概観し、とくに泉に入浴する図像を取り上げて検討する。

## 1、キリスト教における泉、水、血

旧約聖書において泉はまず「知恵」を意味していた<sup>2</sup>。しかし、キリスト教徒は、『創世記』、『詩篇』、

『雅歌』、『イザヤ書』<sup>3</sup>から、泉に、命を与える、治癒の力のあるものという、さらなる意味を見出した。教父アンブロシウス（c.340-397）は、エデンの園の泉をキリストと同一視し、それを永遠の命、知恵、慈悲の源とした。その解釈を引き継いだラバヌス・マウルス・マクセンティウス（c.780-856）は、『創世記』の注釈において「楽園から流れ出た水は、父なる神からの水であるキリストの姿であり、それは説教の言葉と洗礼の贈り物で教会を満たす」と記した。

新約聖書には「生命の泉」の記述があり、それはキリストのメタファーとされた。『ヨハネ福音書』におけるキリストがサマリアの女に向かって言う言葉「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水はその人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る」（4:13-14）<sup>4</sup>、同福音書、仮庵祭最後の日のイエスの言葉「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」（7:37-38）<sup>5</sup>。その予型論的解釈では、予型は『イザヤ書』の「あなたたちは喜びのうちに救いの泉から水を汲む」、「渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい」（12:3、55:1）<sup>6</sup>とされる。

そして『黙示録』では「わたしはアルファであり、オメガである。始めであり、終わりである。渇いている者には、命の水の泉から値なしに飲ませよう」（21:6）<sup>7</sup>、「天使はまた、神と子羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せた」（22:1）<sup>8</sup>、「渇いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、値なしに飲むがよい」（22:17）<sup>9</sup>と記され

ている。

以上の記述では、永遠の命を与える者としてのキリストが示され、罪を洗い流す、水による清めは出てこない。水による清めは、民間信仰の中にもあったものの<sup>10</sup>、キリスト教においては洗礼が重要である。すでに洗礼者ヨハネが行っていたように、ユダヤ教でも洗礼が行われていたが、それは罪の赦しを得るためのものであった。キリスト教はその儀式を引き継いだのみならず、そこにイエスの犠牲によって人間が原罪から解放され、すなわち永遠の命が与えられるという新しい意味を付与した。キリストの死およびその後の復活と洗礼とのアナロジーは、初期キリスト教時代にみられる十字形の洗礼盤からも理解できる（図1）。

また『ヨハネ福音書』には、「しかし、兵士の一人が槍でイエスの脇腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た」（19:34）<sup>11</sup>とあり、キリストの身体から血と一緒に流れ出る水は奇跡とされ、さらには脇腹からの水はまた洗礼の象徴あるいは洗礼の水そのものと解釈された。ローマにもたらされた、ビザンチン皇帝レオ大帝（400-474）の洗礼盤には、「イエスの傷から流れ出し、世界を清める洗礼の聖水は、それゆえここで生命の泉と名付けられる」<sup>12</sup>という銘文がみられる。

次に「悲しみの泉」において欠くことのできない要素となるキリストの聖血について見ておこう。血は生命と同時に死とも同義となる。ユダヤ教においては生命としての血がはっきりと示されているとともに、血を飲むことは禁忌とされた。『レビ記』には「生き物の命は血の中にあるからである。（中略）それゆえ、私はイスラエルの人々に言う。あなたたちも、あなたたちの下に寄留する者も、だれも血を食べてはならない」（17:11-12）<sup>13</sup>、[わたしはイスラエルの人々に言う。いかなる生き物の血も、決して食べてはならない。すべての生き物の命は、その血だからである。それを食べる者は断たれる]（12:14）<sup>14</sup>。この厳しい禁忌はしばらくキリスト教徒にも影響を及ぼしたと考えられる。

すでに初期キリスト教時代から、キリストの傷か

ら流れ出る血と洗礼とのアナロジーが指摘されていたが、キリストの聖血を飲むという行為については、最後の晩餐が重要となる。『マタイの福音書』（26:26-28）、『マルコ福音書』（14:22-26）が伝えるように、イエスは祈りを唱えてパンを裂き、弟子に与えて「とって食べなさい。これはわたしの体である」と、また「この杯から飲みなさい。これは多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」<sup>15</sup>と言った。さらに『ルカ福音書』では、「わたしの記念としてこのように行いなさい」（22:19）<sup>16</sup>とある。初期キリスト教時代にすでにパンとぶどう酒は犠牲の象徴とされていたが、4世紀以来東方教会において、初めて明文化された。ベネディクト会コルビー修道院院長パスカシウス・ラドベトゥス（785-865）は、その著作『キリストの身体と血について *De Corpore et sanguine Domini* 』において、最後の晩餐の際に聖体変化が起きたことを主張した<sup>17</sup>。ローマ・カトリック教会では、1215年のラテラン公会議で、ミサにおいて司祭によりパンと葡萄酒はキリストの肉と血に聖変化する聖変化の教義が承認された。

さて、「悲しみの泉」という語は6世紀以来用いられている。聖大グレゴリウス（540-604）は、『ゼカリア書』の「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と可枯れを洗い清める一つの泉が開かれる」（13:1）<sup>18</sup>の注解において、この泉は受肉した神の泉であり、わたしたちの救世主の慈悲の泉であり、この悲しみの泉においてわたしたちは救われる、と記している。ここでは、「悲しみの泉」と「慈悲の泉」は全く同義で使われている。典礼書においても、9世紀の『ゲラシウスの典礼書』では、「わたしたちは、あなたを悲しみの泉と知ります。それによってわたしたちの罪が清められます」と記されている。13世紀以来、典礼で「悲しみの泉によってわたしを救いたまえ」は常套句となった。中世を通じて、「悲しみの泉」、「慈悲の泉」が同義に、そして「生命の泉」もまた用いられた。



## 2、生命の泉

聖書に記された「生命の泉」<sup>19</sup>はキリスト教美術において早くから図像化された。

初期キリスト教時代から中世まで、「生命の泉」は壺あるいは聖杯、ときに列柱神殿（モノプテロス）や円柱に支えられた円形の神殿、あるいはしばしば十字架、聖杯、キリストのモノグラム、神の子羊を頂き、4つの流れをともしう樂園の山で表されてきた。また、まれに『詩篇』の「涸れた谷に鹿が水を求めるように神よ、わたしの魂はあなたを求める」(42:2)<sup>20</sup>から、流れ出す湧水として表されることもある。ここでは鹿が水を求めるが、「生命の泉」では、しばしばそれを求める鳥や動物がともに描かれる。

たとえば782年頃の『ゴデスカルクの福音書抄本』の「生命の泉」は、クリスマス前夜の祈祷の前に置かれ、カール大帝の息子ピピンの洗礼を記念している。この「生命の泉」は、天頂に十字架を頂いた、周柱円形堂として描かれ、周囲を鹿とともに不死の象徴とされる孔雀をはじめとする鳥たちが埋め尽くしている（図2）。

『黙示録』の生命の泉の例としては、ファン・エイク兄弟による《ヘント祭壇画》（1435年完成）の「生命の泉」が挙げられる（図3）。中央下部パネルの最前景に「生命の泉」が開けた園の中にあり、その上には垂直方向に、祭壇上で胸からの血を聖杯にうける犠牲の子羊、精霊としての鳩、上部パネルに父なる神が表される。ここでは、子なる神キリストの犠牲と聖餐とキリストによって与えられる樂園における永遠の命が示されている。八角形の泉の縁には、先に示した『黙示録』からの引用「これは神と子羊の玉座から流れ出た生命の泉である」の銘文が刻まれている。

プラド美術館にある《慈悲の泉の祭壇画》は、《ヘント祭壇画》を翻案したものだが、ここでは、犠牲の子羊からの血が描かれず、一方泉の水の中にはホスチアが浮かんでいる（図4）。このことによって、泉は明らかに聖餐を意味し、慈悲の象徴となる。泉の水は澄んでいるものの、明らかにキリストの血を

暗示させる。次に示すキリストの血のかわりにホスチアを示す「悲しみの泉」にも共通する表現という点で興味深い<sup>21</sup>。

## 3、悲しみの泉と悲しみの人

「悲しみの泉」という言葉は、上記のように6世紀以来用いられてきたが、キリスト教美術に図像が登場するのは15世紀になってからである。「悲しみの泉」の図像は、主に「悲しみの人」と「磔刑」とともに表される。その他にも幼児キリストなどと一緒に描かれる場合がある。まず初めに悲しみの人とともに表現される図像を見ていく。

マイ＝ブリット・ヴァデルは、その「悲しみの泉」図像のモノグラフィーにおいて、もっとも古い図像のひとつとして、跪く「悲しみの人」の木版画を挙げている。シュヴァーベンで1460-70年に制作されたこの木版画には2枚の刷りが知られているが、ミュンヘン版画素描室に所蔵されるそれは、枠飾りと内側の画像との二つの版で刷られ、着色されている（図5）<sup>22</sup>。キリストは右手で胸の傷を示し、左を正面に挙げてその傷を示しながら、二本の円柱の前に跪いている。キリストの背後、円柱の中程が赤く塗られた矩形の盥となつている。画面左の円柱の上には、キリストの犠牲の象徴である、自らの胸を突きその血で子を養うペリカン、右の円柱の上には、キリストの受難と復活を象徴する、勝利の旗を伴う十字架を持つ子羊が載っている。子羊の足元は赤く塗られ、それぞれの下にある蛇口から滴が落ちている。この図像は他に例がなく大変珍しいものであるが、ヴァデルは、跪くキリストについて、『人間救済の鏡』の写本における父なる神の前で聖母マリアととりなしをするキリストのポーズとの関連を、また矩形の桶については、同じく跪いたキリストが十字架と墓碑の前に表された木版画との関連を指摘している。ロンドンのギルドホール図書館に所蔵される別の刷りには、枠飾りがなく、ここにはみられないキリストの傷からの血が彩色で描写的に加えられている。

同じく15世紀後半にライン上流地方で制作され

た、1477年の詩編の冒頭に貼られた彩色木版画では、十字架の前に「悲しみの人」が立ち、足元のキリストの血で満たされた泉はT型十字形をなし、より明確にキリストの犠牲を示している（図6）。キリストはオランスのポーズで手の傷を示し、父なる神と精霊の鳩も登場している。ここで特筆すべきは、キリストの傷から血ではなくホスチアが流れ落ちていることである。ホスチアは精霊の下に聖杯の中にも表されている。この聖体併存説に基づく象徴とともに、ここでは明らかにキリストの血と肉の聖変化の暗示が示されていることがわかる。泉の水は下の穴を通して、蘇った者たちのところへと流れ出している<sup>23</sup>。画面左に「よきイエスよ、あなたは慈悲の真の泉、その泉がすべての世界を清め、世界を酔わせ、その血でわたしたちを救う」という銘板が見える。

ここで、別の図像ではあるものの関連深い「神秘のぶどう絞り器」を見ておこう<sup>24</sup>。「神秘のぶどう絞り器」は、『イザヤ書』の「わたしはただひとりで酒ぶねを踏んだ。諸国の民のだれひとりわたしに伴わなかった。わたしは怒りをもって彼らを踏みつけ憤りをもって彼らを踏み砕いた。それゆえ、わたしの衣は血を浴びわたしは着物を汚した」（63;3）<sup>25</sup>に基づき、それに関連する『黙示録』、そして『創世記』、『雅歌』、『民数記』<sup>26</sup>などによって解釈された。早くは聖アウグスティヌス（354-430）が、「イエスは約束後の葡萄の房であり、その葡萄は絞り器の下に据え置かれる」としている。この譬えは繰り返し用いられ、初期の12世紀の図像においては、予型論的に磔刑と対比されて表された。しかし中世末期になると聖餐に結び付けられるようになり、キリスト自身がぶどう絞り器で押しつぶされるという図像へと変化していく。ぶどうが絞り押しつぶされるのと同様に、キリストの血が絞り出される様子は、受難をも連想させるきわめてリアルで強烈なイメージである。

1440年頃ユトレヒトで制作された写本『カタリナ・フォン・クレーフエの時祷書』では、頁下方のバ・ド・パージュに「神秘のぶどう絞り器」が見いだされる（図7）<sup>27</sup>。この図の上には、十字架の上に

立って血の滴る胸の傷を示すキリストの挿絵が描かれている。この頁は「聖十字架のミサ」に付されおり、その前に置かれていた全頁大の挿絵は失われている。この図では、鞭を両脇に挟み、両手を手前で繋がれているキリストが、搾り器の二本のねじで挟まれ身をかがめている。ぶどうが絞られるように、その身体から流れ出る血は下の桶にたまり、さらに手前の口から前に置かれた聖杯に流れ込む。挿絵ではキリストの死に対する勝利が寓意的に示され、下では聖変化が暗示され、人間を救済するその血に焦点が当てられている。

北ネーデルラントの生命の泉の画家による1511年のヤン・クレメンソン神父の墓碑銘（図8）では、中央に巨大な泉があり、それは同時に二人の罪人を伴う磔刑の中央ともなっている。泉は2段の構築物となっており、その頂点に磔刑のキリストと聖母マリア、上には父なる神が見える。中段には鞭を手にした「悲しみの人」としてのキリスト、その真下に大きな絞り器に押さえられ、その重みにじっと耐えるかのようにかがむキリストがいる。その身体は血にまみれているのか赤い色をしている。キリストの胸からの血がたまっているのは墓石を思わせる灰色の矩形の桶である。そこから下の大きな泉に血が噴き出し、その泉の蛇口から天使たちが聖杯にくみ取って、集まってきた聖職者をはじめとするあらゆる階級の人々にそれを分け与えている。キリストの慈悲と聖体拝領が分かりやすく示されている。

やがてキリストを押しつぶす板は十字架型となって十字架を担うキリストとして受難のイメージと重なるばかりでなく<sup>28</sup>、しばしば天上に現れていた父なる神が自らそのねじを回す図像も現れる（図9）。ヒエロニムス・ヴィーリクスによるこの銅版画では、キリストの頭上に精霊の鳩、画面右には剣でその苦しみを示す聖母マリアがいる。画面左では、使徒たちが後景のぶどう畑から刈り取ったぶどうを運んできている。キリストの血とぶどうが入った桶の手前には口があり、二人の天使がその流れを聖杯に受けている。ここでは、より直接的に聖変化が示されているといえる。

#### 4、悲しみの泉と磔刑

「磔刑」を伴う「悲しみの泉」の早い例として挙げられる、アヴィニオンで1470-80年頃制作された板絵では、磔刑のキリストを中心に画面左にマグダラのマリア、右にエジプトのマリアがいずれもキリストに向かって指さすポーズを示している（図10）。二人のマリアの上の銘帯および泉の前には銘文が記され、それぞれまず黒い文字のフランスで、次に赤い文字のラテン語で綴られている<sup>29</sup>。

マグダラのマリアの上には、

罪深き者たちよ、あなた方の罪の赦しを求める者たちよ

ここに、そこから慈悲が湧き出ている、真の泉がある。

そしてそこで誰でもその罪をすっかり洗い流すことができる、

私マグダラのマリアがそうであるように。

私は汚い、恥ずべき罪で穢れていた、

その罪から私は清められ、すっかり神聖なものとなり、恢復した。

ここに来なさい、そして私を信じなさい、私がそれについての証明を行うだろう。

（赤字）

しかし、彼はわたしたちの悪行のため傷つけられた、

そして彼の傷によって、わたしたちはいやされた<sup>30</sup>。

エジプトのマリアの上には、

誰でもここへやって来なければならない。

勇気をもって、この慈悲の泉へと、

その心からすべての罪を洗うために。

それによって彼は罪から清められる。

残虐行為という、あれほどの多くの罪をもったエジプト人である私のように。

今や私はそれから清められ、ここであなたたち

に道を示す。

（赤字）

彼（キリスト）がわたしたちを罪から清めてくださいますように、彼の血の流れによって洗い流してくれますように

泉には、

わたしは血の流れに満たされた泉である

人間に豊かな湧水を開いている

私が自ら人間に図を作り

ここで真の理解となる

そして知れ、彼が愚かな高慢をどこからもたらすのか

どこで彼はお前たちを汚す悪習を清めるべきか  
正真正銘の改悔によって

彼がここに来て、彼の罪を清めますように

（赤字）

もし、雄山羊と雄牛の血、または雌牛の灰が汚れた者たちに振りかけられて、彼らを聖なる者とし、その身を清めるならば、まして、永遠の“霊”によって、御自身をきずのないものとして神に献げられたキリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか<sup>31</sup>。

この作例は、銘文によってキリストの血の泉によって人間の罪が清められることが明確に示されていると同時に、画面下に、二人のマリアの名と並んで、初めて「Fons pietatis」の文字が作品に認められるという点でも重要である。

また、ここでは泉は二段になっており、まず直接キリストの血を受ける上段があり、それに付けられた4福音記者の象徴を象った蛇口から、4本の流れが下段へと流れ込んでいる。以後しばしば描かれる4福音記者の象徴の蛇口について、ヴァデルは、キリストを湧水に、福音書記者を川に譬える、福音書に捧げられた中世末期の詩歌と関係づけている<sup>32</sup>。

フランス美術では、12世紀よりエジプトのマリア



が単独で、またはもっとも罪深いマグダラのマリアとともに描かれていた。「悲しみの泉」で表される例は15世紀のフランス壁画にあるものの、それらは南のプロヴァンスではなく、中部のシオンや西部のディセに残っている。16世紀になるとフランス以外にも広がり、ネーデルラントのSの版画家による銅版画（1520-25）（図11）では、マグダラのマリアの前方に修道士が跪き祈りを捧げている。画面下にはその祈祷文が刻まれている。

十字架の下には磔刑の場面と同様に聖母マリアと聖ヨハネが配される場合もある。ポルトのサンタ・マリア・ダ・ミゼリコルディア兄弟会礼拝堂のために1515-17年頃に制作された大型祭壇画（図12）では、中央に磔刑のキリストが立つ円形の泉の両端に聖母マリアと聖ヨハネが嘆きのポーズで立っており、おそらく寄進者であるポルトガルの王族<sup>33</sup>が前景で跪いて祈りを捧げ、泉の後方では同様に祈る聖職者や平信徒たちがぐるりと泉を囲んでいる。この泉の縁には、画面左から「慈悲の泉」、「生命の泉」、「悲しみの泉」と記されている<sup>34</sup>。

## 5、悲しみの泉と幼児キリスト他

「悲しみの泉」は、しばしばエンブレム・ブック（寓意図像集）にも取り入れられた。エンブレム・ブックにおける「悲しみの泉」にはさまざまな図像があるが、ここでは幼児キリストの例をあげる。1600年頃アントニウス・ヴィーリクスによって制作された『愛のキリストに捧げる心臓 *Cor Iesu amanti sacrum*』（図13）<sup>35</sup>は、後に19世紀まで繰り返しコピーされ最も親しまれたエンブレム・ブックの一つである。この書では幼児キリストが心臓とともに表されるが、18枚の銅版画の1枚に「悲しみの泉」がある。キリストの心臓を表すハート形の中の幼児キリストが五つの傷と結びつけられる図像は、15世紀の木版画にも見られるが、「悲しみの泉」として表されるのは、この作例が最初である。「悲しみの泉」では、幼児キリストはハート形の中に立ち、上には精霊の鳩が表されている。その手足の傷からは血が

噴き出し、下の泉に落ちている。泉の両脇では二人の天使が黒い人形のような姿の魂をぬぐって洗い清めている。これは次の入浴の場面と関連する表現である。

「悲しみの泉」は、幼児キリストの他にも、神の子羊、キリストの五つの傷、キリストの心臓、聖三位一体と一緒にあらわされたが、ここではその詳細には触れない。

## 6、入浴図を示す「悲しみの泉」

すでに見てきた「悲しみの泉」に、キリストの血の流れが蘇った人間たちのところに至り、彼らを清めるという図像があった（図7）。次の段階として現れるのが、泉に人間の姿をした魂が入浴するという図像である。その早い例としては、1510刊のものを始めとして16世紀前半のフランスの複数の書籍で用いられた木版画挿絵<sup>36</sup>と1495-1505年頃のネーデルラントで制作された彩色木版画がある。

フランスの木版画挿絵（図14）では、中央に方形の泉の中に立てられた十字架上にキリストが表され、磔刑の場面と同様に、聖母マリア、聖ヨハネ、マグダラのマリアが描かれている。「慈悲の泉」と書かれた泉は、アヴィニョンの板絵と同様に、二段になっており、4福音記者の蛇口も見える。先の例と異なっているのは、泉の下段に入浴する人物が描かれていることである。

ネーデルラントの木版画（図15）では、泉は円形で同様に「慈悲の泉」と書かれており、その中には6人の男女が合わせた手を上に挙げてキリストへの祈りを捧げている。男の中には剃髪の者もいる。泉の前には、修道士と修道女が見える。画面左の銘帯には「ナザレの王万歳」、右の銘帯には「神よ、あなたはあなたの血でわたしたちを救った」とあり、画面下の3行の銘文には「皆ここへ来たれ。偉大なる救いの泉へと。大人も子どもも、あらゆる者が血の風呂で清められる」と記されている。

16世紀のネーデルラントの銅版画（図16）<sup>37</sup>では、中央に高い噴水のような泉が描かれ、頂点にいる磔



刑のキリストの傷から血がしたたり落ちているが、キリストはマグダラのマリアを伴うその磔刑、中央のピエタ、下部の「悲しみの人」において3度登場している。下部の多角形の泉では手を合わせながら入浴する6人の男女の姿が見える。ここでも先の例と同様に剃髪の男がいる。その外側には2本の円柱があり、そこには最初にキリストが血を流した割礼および受難の5場面、さらに下のアーチの中には隠遁者パオロと聖アントニウスにパンを運んでくるカラス、聖痕を受ける聖フランチェスコが描かれている。ここではキリストの受難、傷、血、聖体がより具体的に示されている。

アントニウス・ヴィーリクスの銅版画に、同版画家による先に示した作例の磔刑のタイプとも言えるものがある(図17)。ここでは人間の魂はよりはっきりと子どもの姿で表され、泉の外に立つ天使によって洗い清められている。宗教改革後のカトリックにおける「悲しみの泉」のイメージには、このように天使が人間の姿の魂を洗い清めるものとは別のタイプの図像として、マルティン・フォン・ヘームスケルクの原画でディルク・コールンヘルトが彫版した作例が挙げられる(図18)。泉はその後ろの台座の上に立つ十字架を片手で抱える「悲しみの人」の脇腹の傷からの血で満たされているが、この図像で特徴的なのは画面左にいる、十字架型で先が房のようになっている長い棒で泉をかき回している女性である。女性がかき回しているのは泉の中に浮かんでいる人間の心臓である。画面左側の心臓はすでに清められ静かに浮かんでいるが、右側の心臓はまだ清められていないため歪んでおり、煮立ったように泡立っている。奇妙な図像ではあるが、心を洗い清めることを直截に表しているとも言える。後景には小さく十字架を担ぐキリストが表され、その受難が暗示されている。この図像も大変好まれ、コピーが制作された。

ブレーメンの大聖堂にある、1547年に没した大聖堂主任司祭セガバルド・スリュエファーのための墓碑銘レリーフは、ヴァデルによれば最初のプロテスタントの「悲しみの泉」である(図19)<sup>38</sup>。ここでは

2段の泉が表され、上段には磔刑の下にアダムとエヴァが立っており、蛇が十字架に巻き付いている。下段には男女7人の姿が見えるが、全員が祈りのポーズをしているわけではない。画面左には跪く寄進者が、右下には洗礼者ヨハネが表されている。銘帯には聖書の引用が記されている。プロテスタント教会では、墓碑銘にしばしば「悲しみの泉」が用いられた<sup>39</sup>。

16世紀のフランスでは、ステンドグラスといったモニュメンタルな芸術や工芸作品にもこの入浴の図像が描かれている。工芸品の例として、16世紀第2四半世紀フランスのカメオがある(図20)。この作品は二連板となっており、「悲しみの泉」と磔刑が対になって表され、ネーデルラント美術の影響が認められる。この「悲しみの泉」は「悲しみの人」を伴うタイプであるが、泉の中央に立つ「苦しみの人」はオランダのポーズで、主にその両手や足の傷から血がしたたり落ちている<sup>40</sup>。泉の縁には「慈悲の泉」と刻まれ、1組の男女が入浴しており、画面左には跪き祈る寄進者の姿がある。

ステンドグラスでは、ヴァンドームの聖三位一体聖堂や、現在は失われたブーモアの城郭の例がある、ブーモアの湯治を伝える残された素描(図21)では、泉は二段で丸い上段にはおそらくアダムとエヴァがおり、方形の下段はかなり広く、すでに入浴している人やこれから入ろうとしている人がみえる。

さて、これまで多くの「悲しみの泉」における入浴図を見てきたが、南ネーデルラントの画家ジャン・ベルガンブによる三連祭壇画ほど、この図像を生き生きと表しているものはない(図22)。ジャン・ベルガンブは、現在は北フランスのドゥエで生まれ、故郷やその近郊で多くの祭壇画を制作した<sup>41</sup>。その修業時代については分かっていないものの、ブリュッヘ、ブリュッセル、アントウェルペンなどにいたのではないかと考えられている。最先端のイタリア的な要素はなく、やや古風な様式を示している。この祭壇画もドゥエ近郊のベネディクト会のアンチン修道院のために1520年頃に制作された<sup>42</sup>。扉前面には、「Deo favente」のモットーとともにサン・アラゴ

ンのシャルル・コニン大修道院長と修道院の紋章が見られる。修道院はフランス革命期に破壊され、祭壇画は1882年よりリリーの美術館に所蔵されている。

中央パネルでは、広々とした風景を背景に、四つ葉型の金属製の泉中央にキリストの磔刑が聳え立っている。泉には男女の入浴者がおり、泉に入ろうとしている人々もいる。男の中には剃髪の方が認められる。また画面左の中景奥では衣を脱いでいる者の姿が遠くに見える。泉の外では、画面左に「慈愛」の擬人像、右に「希望」の擬人像が立ち、人々が入浴するのを手助けしている。十字架の上の銘文には、すでに見た「神秘のぶどう絞り器」と同様の『イザヤ書』の「わたしはただひとりで酒ぶねを踏んだ。諸国の民のだれひとりわたしに伴わなかった」(63:39)<sup>43</sup>と、キリストの左にいる天使の銘帯には『イザヤ書』の「エドムから来るのは誰か。ボツラから赤い衣をまっとうて来るのは」(63:1)<sup>44</sup>、そして右の天使の銘帯には『イザヤ書』の「なぜ、あなたの装いは赤く染まり衣は酒ぶねを踏む者のようなのか」(63:2)<sup>45</sup>が記されている。

右翼パネルでは、建物の2階に修道士が銘帯を掲げ、そこには『イザヤ書』の「あなたたちは喜びのうちに救いの泉から水を汲む」(12:3)<sup>46</sup>が記されている。下では「信仰」の擬人像が十字の旗と杓を持ち、神学の守護聖人であるアレクサンドリアの聖カタリナを導いている。

左翼パネルでは、服をぬぐ人々を天使が導いている。建物の2階からは男が銘版を示し、そこには『黙示録』の「この白い衣を着た者たちは誰か。また、どこから来たのか」(7:13)<sup>47</sup>の問いがあり、天使の上の銘帯にはその答えである「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を子羊の血で洗ったのである」(7:14)<sup>48</sup>が見える。

欄干の右上の銘板には、『黙示録』から「わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方に」(1:5)<sup>49</sup>と記されている。

引用されているのは聖書の語句であり、聖血のミサに関連するという説、あるいは、11世紀に創設されたアチン修道院が清潔のトロフィー型聖遺物を所

得したという説は史実に合致せず、近年では退けられている。手前の髪をほどくようなしぐさをする女をマグダラのマリアと結び付けて聖史劇との関連も指摘されているものの、この複雑な祭壇画の意味は未だ十分には解説されていない。

造形的には、すでに指摘されているように、この祭壇画の入浴表現は、「若返りの泉」からの影響が見て取れる。「若返りの泉」は、12世紀半ば以降に広まる『祭司ヨハネの手紙』や『アレクサンドロス大王物語』に初めて現れる<sup>50</sup>。その後13世紀のフランスの宮廷文学において「愛」のテーマと結びつき、14世紀の象牙彫り彫刻において宮廷風恋愛の図像とともに盛んに表された。そこでは老人が若返りって性的な能力をよみがえらせ青春を謳歌する。15世紀以降になるとしばしば「若返りの泉」に道化が現れ、老人の愚行を揶揄する批判的な図像となっていく。単に肉体がよみがえるという現世的なご利益を与える「若返りの泉」と、魂を清め、永遠の命を与える「悲しみの泉」では、その意味は本来正反対だと言える。

この祭壇画では、その銘文をはじめとして「悲しみの泉」としての宗教的な意味は明らかである。しかし一方で、世俗的な「若返りの泉」を連想させる表現も確かに認められるのである。たとえば、泉の画面右にいる女は手にホスチアを持っているが、同時に若い男の腕を掴み泉に誘っているようでもある。また手前の女は泉の血を杯に汲み入れているが、杯は聖杯ではなく「若返りの泉」に出てくるようなぶどう酒の杯である。世俗的な男女の図像において、ぶどう酒の杯を勧めるのは求愛を示す。これまで示してきた入浴を伴う「悲しみの泉」では、魂を表す人間はすでに泉の中にいて主に祈りを捧げる姿で表されていたが、ここでは服を脱いで入浴の準備をする者もあれば、入浴している者が思い思いのポーズをしているという点も[若返りの泉]を連想させる。意味においては矛盾するような世俗の図像を応用した理由は判然としない。「若返りの泉」の図像は、15世紀後半から16世紀初めでは南フランスあるいはネーデルラントではほとんどなく、むしろド

イツの版画に作例が多い(図23)。ベルガンプが古いフランスの図像を知っていたとは考えにくく、むしろ同時代の版画からインスピレーションを得たと考える方が妥当だろう。

## おわりに

本稿では、「悲しみの泉」の成立とその図像を概観するとともに、とくに泉に入浴するという図像に注目して考察を行った。ベルガンプの祭壇画は中でも特異な表現となっている。フランスではステンドグラスなどの大芸術から挿絵や工芸品といった小芸術にいたるまで、またネーデルラントの木版画でも入浴する「悲しみの泉」の作例が見られた。とはいえ、ベルガンプの祭壇画では、明らかに画家が「若返りの泉」の図像を知っていたことを物語っている。年代的に先行する作例が多くないため、確実な手本を示すことは難しいものの、画家が想像のみでこのような表現を描いたとは考え難い。やはり版画によって図像が伝達された可能性が高いといえるだろう。

## 註

- 1 「悲しみの泉」については、Maj-Brit Wadell, *Fons pietatis: Eine ikonographische Studie*, Göteborg, 1969; Esther P. Wipfler, *Fons pietatis*, *RDK Labor*, 2004, [http://www.rdklabor.de/wiki/Fons\\_pietatis](http://www.rdklabor.de/wiki/Fons_pietatis)参照
- 2 キリスト教における泉の意味とその図像については、Esther P. Wipfler, *Fons: Studien zur Quell- und Brunnenmetaphorik in der europäischen Kunst*, Regensbrug, 2014, pp. 39-87参照。『旧約聖書』における知恵としての泉は『シラ書』(1:5)、『箴言』(18:4)、『バルク書』(3:12)、『民数記』(21:16)参照。
- 3 『創世記』(2:10)、『詩篇』(36:10) および (42:2)、『雅歌』(4:1,15)、『イザヤ書』(12:3) および (55:1)。
- 4 『新共同訳 聖書』、日本聖書協会、1996年、新169頁。
- 5 同上書、新179頁。
- 6 同上書、旧1072、1159頁。
- 7 同上書、新478頁。
- 8 同上書、新479頁。
- 9 同上書、新480頁。
- 10 カール大帝は教皇により泉、樹木、石に対する信仰を禁じられた。Wadell, op.cit., p.13.
- 11 前掲書『聖書』、新208頁。
- 12 Wadell, op.cit., p.14.
- 13 前掲書『聖書』、旧189頁。
- 14 同上。
- 15 同上書、新53頁。
- 16 同上書、新154頁。
- 17 Wadell, op.cit.,
- 18 前掲書『聖書』旧1193頁。
- 19 生命の泉については、Esther P. Wipfler, *Fons vitae*, *RDK Labor*, 2004 [http://www.rdklabor.de/wiki/Fons\\_vitae](http://www.rdklabor.de/wiki/Fons_vitae)
- 20 同上書、旧875頁。
- 21 エヴリン・アンダーヒルは、『ヘント祭壇画』および『慈悲の泉の祭壇画』において、初めて生命の泉がキリストの血の泉へと変化することを指摘している。Evelyn Underhill, *The Fountain of Life: An Iconographical Study*, *Burlington Magazine*, vol.17, 1910, pp. 99-109.
- 22 Achim Riether, *Einblattholzschnitte des 15. Jahrhunderts*, Staatliche Graphische Sammlung München, 2019, pp. 106, 368-69, no. 79.
- 23 死者の復活については、『マタイ福音書』(27:51-51) 参照。
- 24 「ぶどう絞り器のキリスト」とも呼ばれるこの図像については、Gertrud Schiller, *Iconography of Christian Art*, vol 2, New York, 1968, pp. 228-229, fig. 808-812; James H. Marrow, *Passion Iconography in Northern European Art of the Late Middle Age and Early Renaissance*, Kortrijk, 1979, pp. 83-96; Alois Thomas, *Christus in der Kelter*, *RDK Labor*, 1953, [http://www.rdklabor.de/wiki/Christus\\_in\\_der\\_Kelter](http://www.rdklabor.de/wiki/Christus_in_der_Kelter)
- 25 前掲書『聖書』、旧1164頁。
- 26 『黙示録』(19: 13-15)、『創世記』(49:11)、『雅歌』(1:14)、『民数記』(13:23-24)。
- 27 The Morgan Library, Ms. M 197/945, p. 121. <https://www.themorgan.org/collection/hours-of-catherine-of-cleves/213>
- 28 十字架型のプレスの最も早い例は、1405年のネーデルラント写本に見られる。Marrow, op.cit., 86.
- 29 銘文のテキストはヴァデルからの引用。Wadell, op. cit., p. 35.
- 30 この句は、『イザヤ書』(53:5) から採られている。前掲書『聖書』、旧1150頁。
- 31 『ヘブライ人への手紙』(9:13-14)、同上書、新411頁。
- 32 Wadell, op. cit., p. 36.
- 33 マヌエル1世(1549-1521)とされる。註27美術館サイト参照。
- 34 この作品はコリン・デ・コーテルに帰されている。サンタ・カーサ・ダ・ミゼリコルディア美術館サイト<http://www.mmipo.pt/pt-pt/obras/fons-vitae>
- 35 年記はない。制昨年は、かつては1585-6年とされていたが、近年の研究では1600年頃とされる。Radoslaw Grzes-ś kowiak and Paul Hulsboom, *Emblems from the Heart: The Reception of the Cor Iesu Amanti Sacrum Engravings*

Series in Polish and Netherlandish 17th-Century Manuscripts, *Werkwinkel* 10 (2), 2015, p. 133.

- 36 初版は1510年パリで出されたマーセル・フロリドゥスによる『薬草誌*De herbarium*』、後に1521年、1532年、1547年に別の書籍でも挿絵に用いられている。Wadell, op.cit., p.118, no.71.
- 37 Ibid., p. 120, no. 88. ヴァデルはこの版画をSの版画家帰属、16世紀初めとし、図版の出典を大英博物館としているが、同博物館にこの版画は所蔵されておらず、詳しい情報を欠いている。
- 38 Ibid., pp.122-123, no. 118.
- 39 Ibid., p. 77.
- 40 このキリストのポーズは、1571年にリヨンのジョルジュ・ト・ド・モントネにより出版されたピエール・ヴォエリオのエンブレムブックの挿絵に描かれた「悲しみの泉」のキリスト像に酷似する。Wadell, op.cit., p.119, no. 82.
- 41 ベルガンブについては、Goodon Campbell(ed.), *The Grove Encyclopedia of Northern Renaissance Art*, vol. 1, pp. 145-147.
- 42 註35の文献では制昨年は1505-10年としている。
- 43 註22参照。ここに『イザヤ書』の語句が記されているということは、「神秘のぶどう絞り器」と「悲しみの泉」との関連性を示唆する。
- 44 前掲書『聖書』、旧1164頁。
- 45 同上
- 46 同上書、旧1079頁。
- 47 同上書、新451頁。
- 48 同上。
- 49 同上書、新452頁。
- 50 「若返りの泉」については、保井亜弓「ゼーバルト・ベーハムの若返りの泉—大型木版画を読み解く愉しみ」、幸福輝編『版画の写像学』、ありな書房、2013年、61-102頁参照。

50, 72, 57, 66, 47, 40; 図7、The Morgan Library, Ms. M 197/945, p. 121. <https://www.themorgan.org/collection/hours-of-catherine-of-cleves/213>  
図8、National Gallery Prague, D4131; 図9、10、12、15、© The Trustees of the British Museum; 図22、M. Bradburne (ed.), *Blood: Art, Power, Politics and Pathology*, München/London/New York, 2001, p. 73; 図23、Holm Bevers, Meister E.S.: Ein oberrehinischer Kupferstecher der Spätgotik, Cat. Exh. München Graphische Sammlung, 1986,

(やすい・あゆみ 芸術学／西洋美術史)

(2019年11月7日 受理)

## 図版出典

図1、Esther P. Wipfler, *Fons: Studien zur Quell- und Brunnenmetaphorik in der europäischen Kunst*, Regensburg, 2014, p. 49; 図2、Web Gallery of Art; 図3、<https://www.touchstonemag.com/archives/article.php?id=29-05-046-c> 図4、13、Wikipedia; 図5、Achim Riether, *Einblattholzschnitte des 15. Jahrhunderts*, Staatliche Graphische Sammlung München, 2019, p. 106; 図6、12、14、16、17、18、19、20、21、Maj-Britt Wadell, *Fons pietatis: Eine ikonographische Studie*, Göteborg, 1969, pl.13, 75, 39,





図1、洗礼盤、6世紀、チュニス、バルド美術館

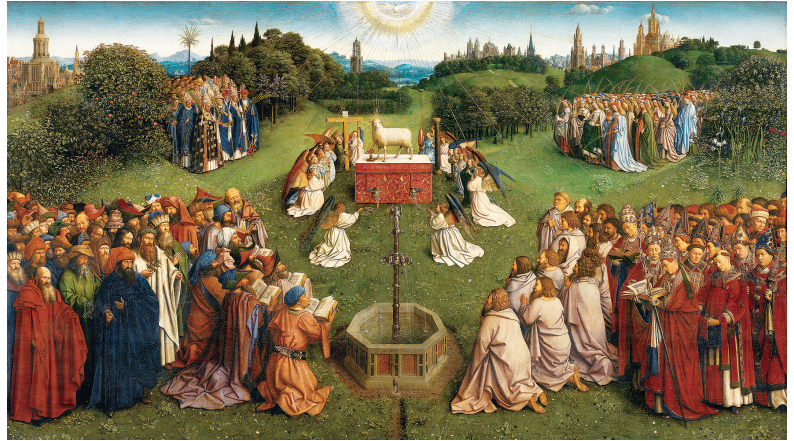


図3、ファン・エイク兄弟、《ヘント祭壇画》、1432年、ヘント、聖バヴォ聖堂、部分



図2、ゴデスカルクの福音書抄本、983年、パリ、国立図書館. lat.1203, fol. 3v.



図4、ファン・エイク工房、《慈悲の泉》、1440-1450年、ブラド美術館、部分





図5、シュヴァーベン、《悲しみの泉》、1枚木版画、彩色、1460-70年頃：80×62mm



図6、南ドイツ、《悲しみの泉》、1枚木版画、彩色、80×62mm



図7、カタリナ・フォン・クレーフエの時祷書、1440年頃、モーガン図書館、Ms.M 197/945, p.121



図8、生命の泉の画家《生命の泉》、90.5×73.5cm、プラハ国立絵画館





図9、ヒエロニムス・ヴィーリクス、《神秘のぶどう絞り器、エングレーヴィング、1619以前、142×92mm

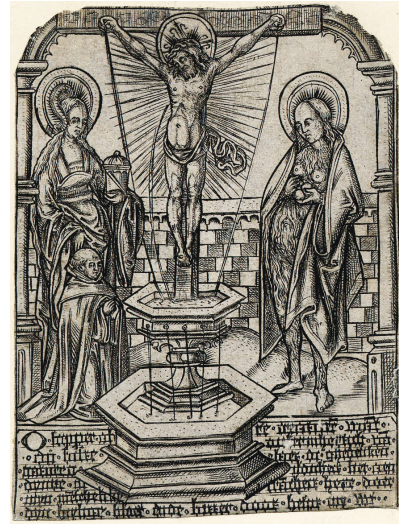


図11、Sの版画家、《悲しみの泉》、エングレーヴィング、16世紀前半、218×165mm

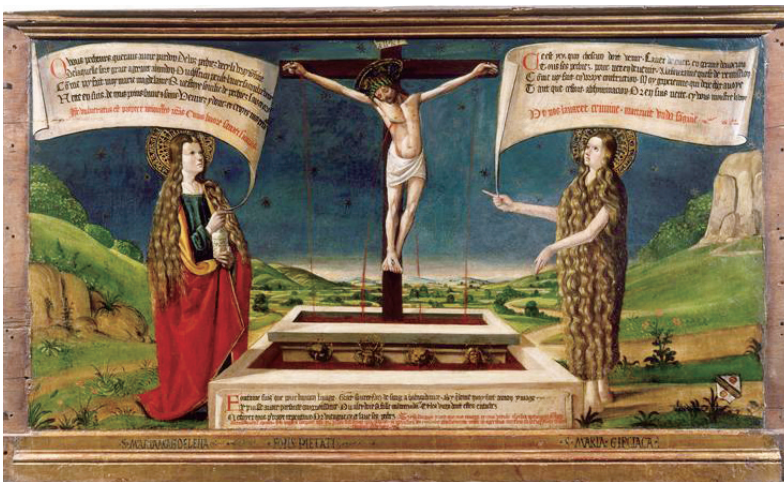


図10、アヴィニョンの画家、《悲しみの泉》、板絵、1440-70年、104×179.5mm、アヴィニョン、プティ・パレ美術館



図12、アントニウス・ヴィーリクス、《悲しみの泉》、エングレーヴィング、1600年頃、91×55cm

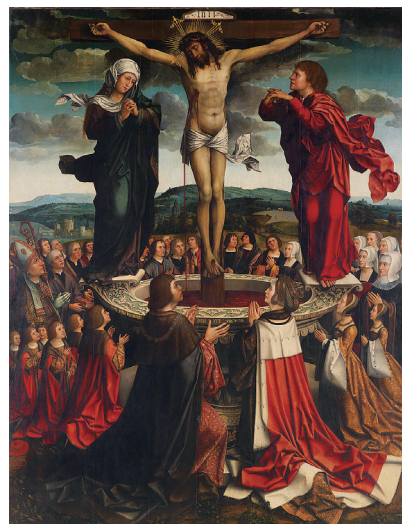


図13、コリン・デ・コーテル帰属、《生命の泉》、板絵、1515 - 1517年、267×210cm、ミゼリコルディア・ド・ボルト美術館





図14、フランス、《悲しみの泉》、木版画挿絵、1510年、101×73mm



図15、ネーデルラント、《悲しみの泉》、1枚木版画、彩色、1495-1505年、118×74mm



図16、Sの版画家に帰属、《悲しみの泉》、エングレーヴィング、16世紀前半、98×75mm



図17、アントニウス・ヴィーリクス、《悲しみの泉》、エングレーヴィング、115×70mm





図18、ディルク・コルンヘルト彫版（マルテン・ファン・ヘームスケルク原画）、《悲しみの泉》、エングレーヴィング、365×258mm



図19、作者不詳、《悲しみの泉》、レリーフ、石、1517年、150×90cm、ブレーメン大聖堂

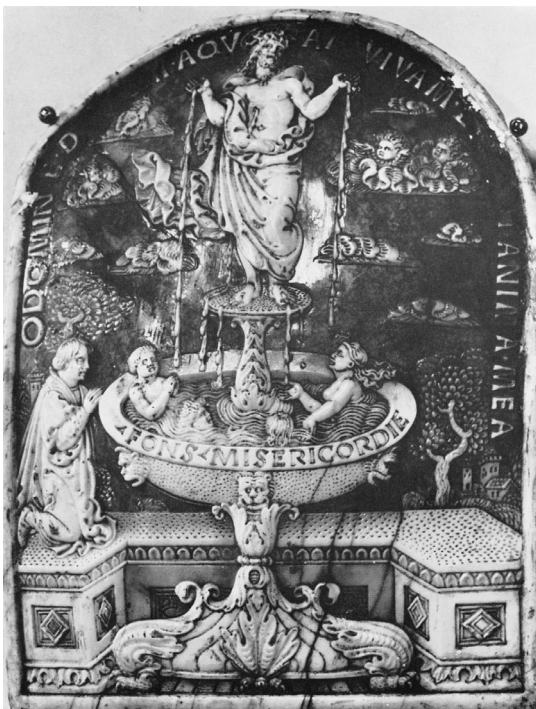


図20、フランス、《悲しみの泉》、カメオ、80×61mm、バルジェロ美術館

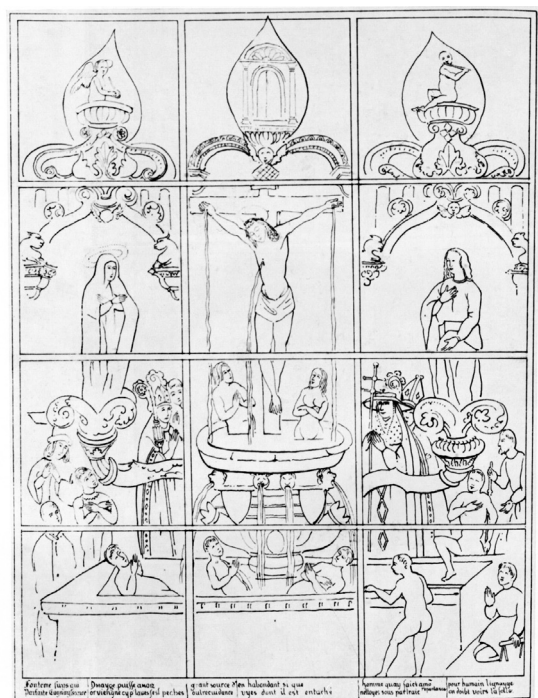


図21、《悲しみの泉》、焼失したブーモア城ステンドグラスの素描



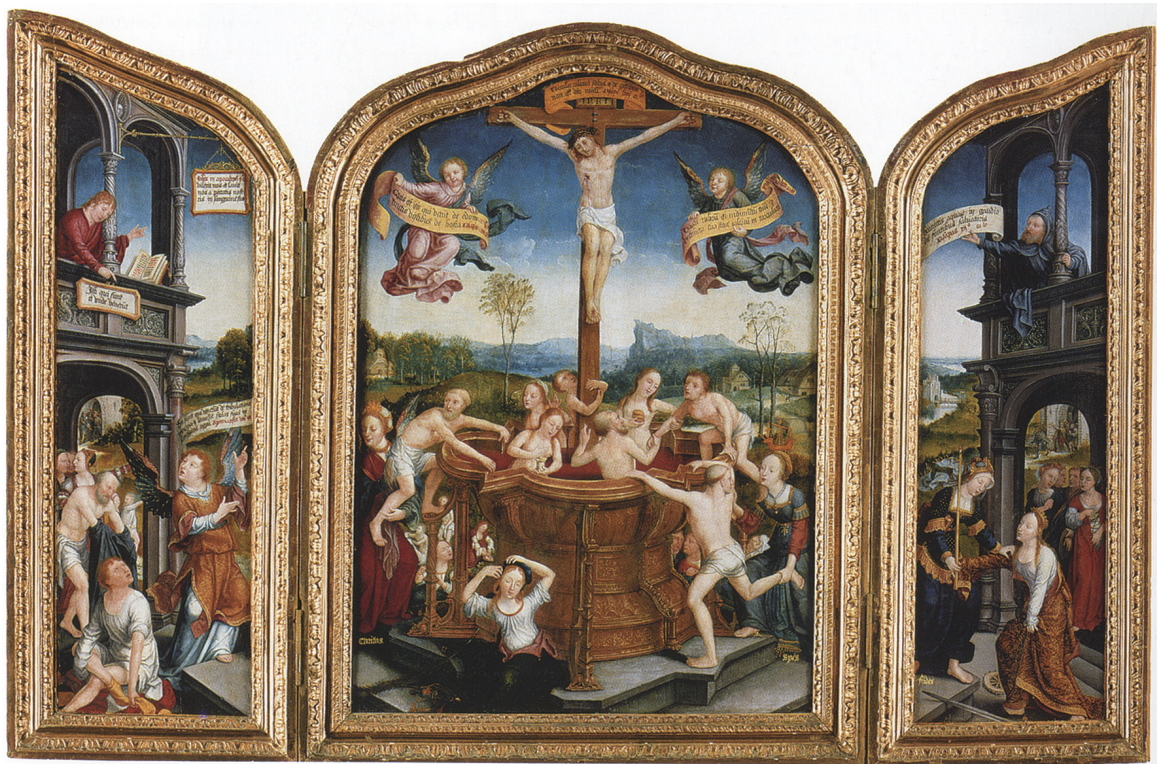


図22、ジャン・ベルガンブ、《悲しみの泉》、板絵、1520年頃、80×57cm（中央）、リリー美術館



図23、銘帯の版画家、《若返りの泉》、エングレーヴィング、1460-70年